

## ハトムギ栽培研究の現段階(続)

誌名	農林水産技術研究ジャーナル
ISSN	03879240
著者	山崎, 正枝
巻/号	5巻3号
掲載ページ	p. 37-37
発行年月	1982年3月

## ハトムギ栽培研究 の現段階(続)

一生産工学研究会主催  
56年度検討会から—

山崎 正枝

前号に続き、本号では水管理その他の成績概要を紹介する。

**水管理：**ハトムギは水田利用にとくに意義があるが、その水管理は岡山では直播、愛媛では直播と移植でとくに検討した。直播栽培では岡山が出芽後25日間の入水は悪く、30~35日後、草丈40~41cm、葉数7~8枚、莖数7~8本のころの入水が良く、早期入水は生育が抑制されるとし、愛媛もそれを認めるが入水は3葉期以後ならよいとされている。岡山も愛媛も作付初期の浸水回避と排水不能地には畦立がよいと認め、愛媛は25cmの高畦で播種7日後の浸水に支障なく多収になった。岡山は地下水分が十分な場所では地表は全期間湿潤ないし過乾畑状態が最も多収になった。

愛媛は移植栽培では移植10日後入水が良いとし、またほかに本年度は全期湛水、後期湛水(出穂の約20日前入水)、全期乾田を比較し、後期湛水が多収だった。前年の早期播種では生育が良すぎたので全期湛水の初期生育抑制がかえって幸して増収になった由。

このように水のかけ引きは、次で触れる稈長の伸長抑制に活用面もある。

埼玉からは水のかけ引きで草丈30cmの差が出る、長野からは生育初期の保温と雑草防除効果、九州農試は成熟近くまでの水入れて収穫時脱落粒の減少と後期雑草防除効果ありなどの発言もあった。

**栽培による短稈化：**機械収穫には稈長150cm以下くらいが望ましく、短稈種の選抜育成が本筋だろうが、現在の中晩生では150~200cm以上になることが多く、栽培面で短稈化を検討している。水管理による伸長調節も前述のように実用価値があり、研究が望まれる。今回は、生育途中で草丈の半分ないし3分の1の莖葉切除による短稈化も、埼玉、兵庫、岡山北部、福岡豊前で試みたが、通覧して切除がおそいほど短稈化は大で穀粒品質に影響少なく、やや良質化の傾向はあるが、成熟は遅れ、収量10~20%減になるようで、この方法はなかなかむずかし

そうだ。

**刈取適期：**岡山では判定資料にポットと圃場で岡山在来を材料に着色粒率(茶褐色に変わり始めた粒の意と思う)と収量の関係を調べ、株の穀粒の50%が中熟粒のときは主稈上位3節で75~80%が中熟以上の粒になり、全粒完熟時の推定収量の75%になるし、三重でコンバイン収穫の損失粒や損傷粒の発生その他から刈取適期は着色粒(黒褐~褐緑粒)50~60%の時期としたのとほぼ一致する。

**栽培の機械化：**機械化栽培の体系化はまだだが、その前提となる移植や収穫に稲用田植機や自脱コンバイン等の活用試験はほとんど各県でやっている。

移植作業での欠株率は既に述べたとおりで実用可能といわれる。コンバイン収穫は機種の違いが田植機より大きいようで、県によってそのまま使用可、少し改良で可能、刈り搬送部のこきの深さをさらに浅く調節できる改良をなど、なお検討余地があり、乾燥、選別などにも問題が残った。

**その他の事項：**除草剤は福井、茨城、長野飯山、愛知、岡山、香川、長崎、鹿児島各県がやり、病虫害防除(福井その他)、肥料・農薬の薬害(長野飯山)、青刈栽培(群馬)、成熟期の形態と開花成熟推移(福井、広島)などの報告もあったが、内容も不確定部分が多いと思われるので紹介は割愛する。

なお、多い病害で葉枯病については、本病が稲のごま葉枯病に近い病害で、栄養(晩期追肥)で軽減できる(農技研山田昌雄氏)とか、黒穂病と同様に種子消毒も有効で、葉枯病発生圃場の脱落粒はその圃場の翌年の病源になりうる(東北農試)という話もあった。

× × ×

以上、検討会に出た成果の要約に不備のあることをおそれながら、大要を紹介した次第である。終るにあたり、検討会の冒頭で戸荻義次氏が述べたあいさつの中から次のことを紹介したい。

昭和初期の農村疲弊時代、農林省はワタ、ナタネ、ハッカ、除虫菊その他地域適作物をふやすことに努めたが、時の農産課長はそのねらいは農家の収入増にあると述べた。小麦増収5カ年計画も目的は農家収入の増で、もし輸入を圧迫すればそれは結果にすぎなかったと。国の農業がだいじと思うなら今も同じというべきか。(当協会技術主幹)

前号40ページ表題の「生産工学研究会は「生産工学研究会」、41ページ右下から19行目の「82株」は「28株」の誤りでした。